

◆余白で猫の存在感を強調する



はじめに

現在、私は自宅のある岡山市内を中心に水墨画の指導を行なっていますが、東京でもこれまでにたびたび講習会を開催し、二〇一二年からは日貿出版社の会議室を教室として、月に一回（二日間）のペースで定期的に指導にあたっています。地域は違えども参加の皆様は熱意にあふれていて、私にとっても毎回の講習会が楽しみになっています。

さて、水墨画の魅力の一つにさまざまな意味での「シンプルさ」があります。まず筆墨硯紙といった古来変わらぬ用具があり、また力むことのない筆の動きにより、さらに墨一色の諧調でそれも筆数少なく簡潔に花鳥から山水までの自然の姿をとらえるという魅力です。そして、この自然の姿を的確にとらえ、画として表現するためには、先人が生み出した描法があり、これを繰り返し返して学んでいくことにより、はじめて自分独自の「墨の世界」が生まれてくるのです。

前述した多くの講習会を通じて、私はこの「シンプルさ」こそ、皆様が水墨画に期待している目標の一つではないかと考えています。

本書の表題を構成している「さらり」という言葉には、「感触がなめらかで軽いさま」
「物事をとどこおりなくするさま」という意味がありますが、ここでは「さらり」ということに、「味わい深いシンプルさ」という意味も加えてみたいと思います。本書では、この「さらり」と描くコツを、用具や描法の基本を紹介しながら解説していきましょう。

二〇一四年四月吉日

著者

はじめに..... 3

1章 基本から始める..... 7

1 水墨画の特徴とは..... 8

1—形よりも意が優先..... 10

2—筆順について..... 11

3—遠近の表現..... 12

4—省筆について..... 13

2 用具の基本..... 14

《筆》..... 14

羊毛・イタチ・オロンピー

《墨》..... 18

茶墨・青墨

《硯》..... 19

端溪硯・歙州硯

《紙》..... 20

画仙紙・楮紙・鳥の子・麻紙

3 描法の基本..... 24

1—筆の使い方の基本..... 24

直筆・側筆・逆筆・三墨法

2—墨の濃さの調節..... 27

濃墨・中墨・淡墨

3—にじみとかすれ..... 28

4 各種の応用技法..... 30

1—線描と没骨..... 30

2—筆の調節..... 31

ねじる・平らにつぶす

3—墨を筆の片側に取る方法..... 34

4—筆の持つ位置を変える..... 38

筆の端を持つ・筆の根元を持つ

5—書法で描く..... 40

6—潑墨、破墨、たらし込み、

ほかして描く..... 42

7—特殊技法について..... 46

揉み紙・筋目描き・水を指す・

筆先に水を取る

2章 さらりと描く18作例

1 実際に描いてみよう

ドジョウを描く	53
クワガタを描く	54
富士山を描く	56
野菜を描く	58
亀を描く	60
お地蔵さんを描く	62
兜を描く	64
雛人形を描く	66
達磨を描く	68
スポーツカーを描く	72
朝顔を描く	74
農作業を描く	78
フグを描く	80
子供を描く	82
犬を描く	84
観音様を描く	88
東京スカイツリーを描く	90
クラゲを描く	94

2 制作への応用

藤・スズムシ・コオロギ

・カミキリムシ・トンボ	98
蝶・子犬・カタツムリ・バッタ	99
さくらんぼ	100
柚子・ザクロ・桃	101
ウナギ・無花果・蓮根	102
桜・刈取り	103
鍾馗と鯉のぼり	104
スクーターと猫・子猫・雨上がり	105
群雀・かわせみ・にわとり	106
カマス・サバ・ソイ	107
双馬・馬	108
虎・熊と蜂	109
雀Ⅰ・雀Ⅱ	110
チドリ・メジロ	111
伊根風景・トスカーナにてⅠ	112
トスカーナにてⅡ	113
暖炉の前で・子供の頃から	114
高梁にて	115
瀬戸内	116
ワインセラー	117
信州の雪景色	118
一葉一滴	119

◆ 背中の表情と体のひねりをとらえる



1章

基本から始める

1 水墨画の特徴とは

私は、最初の著書となる『水墨画の上達法』（日貿出版社・一九九七年刊）の序文で、父の言葉を引用して次のように書きました。重複になって恐縮ですが紹介させていただきます。

父・藤原楞山が、以前私にこんなことを言いました。「伝統は栗の皮で個性はその中味。伝統のみでは虫食いの栗。個性のみというのはなく個性は皮に守られている」。

水墨画を学ぶには常に新しく個性的なものを追究する必要はありますが、伝統の上に成り立っていることを忘れてはならないのです。新しいものを描くといっても、古くからある筆を使い墨を使うわけであり、何もないところにボンと新しいものが生まれてくるわけではありません。

さて、ここ数年来、水墨画の共通認識が大きく揺らいでいます。古来、筆墨硯紙は「文房四宝」といわれるように、ごく一部の人のしか使うことが許されない、非日

常的で貴重な「宝」でしたが、現在では多くの人が気軽に手にすることができ、書道や水墨画といった墨の表現の領域も広がりました。そして、その広がりに応じて多様な画風が登場しましたが、一方でその基本的な表現から逸脱した作品も多く見受けられるようになりました。

ここで改めて基本を学び、未来につながる水墨画の表現の可能性を考えていきたいと思います。

まず、水墨画を描く時の基本的な留意点を考えてみましょう。そのポイントとして次の四項目を設定してみました。

- 1—形よりも意が優先
- 2—筆順について
- 3—遠近の表現
- 4—省筆について

また、作品に対する構図の効果は、画家の制作意図と密接にむすびついています。それぞれの場面において最も効果的な構図を考えなければなりません。構図に関する基本は2章の「2—制作への応用」（98頁）で具体的な作例を収録しましたので参照して下さい。



◆基本となるのは墨の濃淡による変化と余白の活かし方になる

1 形よりも意が優先

外側だけではなく内側も大切な要素になるという、いわゆる「写意」の考え方です。例えば樹木を描くにしても、その生きてきた歴史（孤高さや力強さなど）を想像して表現することです。

下図でも、単に目の前の形を写すのではなく、「自分の描きたいことはこれだ」という思い（意）で、配置や表情の工夫をしたいものです。

父親のカモはしっかりと前を見つめ、母親は子供のことを考え周囲に気を配り、この父親と母親の間はつかずはなれずの位置とし、子供たちは遊びながらも一生懸命に親の後をついていく、といった表現にしました。

●「こ」の字を
書くように



●横向きの時

●首に角度がつく

●頭の角度と位置を変化させることで表情を出す



◆鴨の親子を描く（体の向きと配置がポイント）



2 筆順について

墨と紙（兩仙紙）の効果を考えると、手前から奥へと描くことが原則になります。また、花鳥では濃い部分から淡い部分へ描くようにします。

◆チューリップを描く（花の筆順）



筆順が異なるとチューリップの花にならない。

◆牡丹を描く



◇なぜ筆順が大切かというと、それは最初に描いた部分が発光前に出てくるといふ墨と紙の関係にある。風景画についてもいえることで、この原則は共通する。

3 遠近の表現

「色彩遠近法」や「線遠近法」など写実を主体とする西洋の絵画とは異なり、「遠上近下」「遠小近大」の手法や、特に山水画では北宋時代に提唱された高遠・深遠・平遠からなる「三遠法」という遠景の表現方法があり、ここにも墨色の諧調の変化が生きています。ただし近代では西洋画の表現も多様に取り入れられています。

◆三遠法で表現する



◆描く速度に変化をつける（手前はゆっくり、奥は早く描く）



◇上図の三遠法では、左側に高い山を「高遠」で見上げる構図で、左中と右下の岸辺や茂みを「深遠」でのぞき込む構図で、また右側の山並みを「平遠」で遠くを見張るかす構図で表現した。また、下図では、ゆっくり描いて近景を、だんだん早く描いて遠景を表現した。

4 省筆について

1で解説した「形よりも意が優先」という考え方から、水墨画では対象を写真のように緻密にとらえるのではなく、スピードのある筆法やにじみやかすれなどで、「意」を表現することがポイントになります。そのためにも描法の上で筆数を少なくすることが大切になります

◆二羽の鶴を可能な限り少ない筆数で描く



◇画面では、胴体をあえて余白として残し、体の輪郭と顔だけを描いている。しかし、描かない部分があっても、鶴の体の質感と動きは把握できる。つまりどこを描き、どこを描かないかという省略の面白さがある。

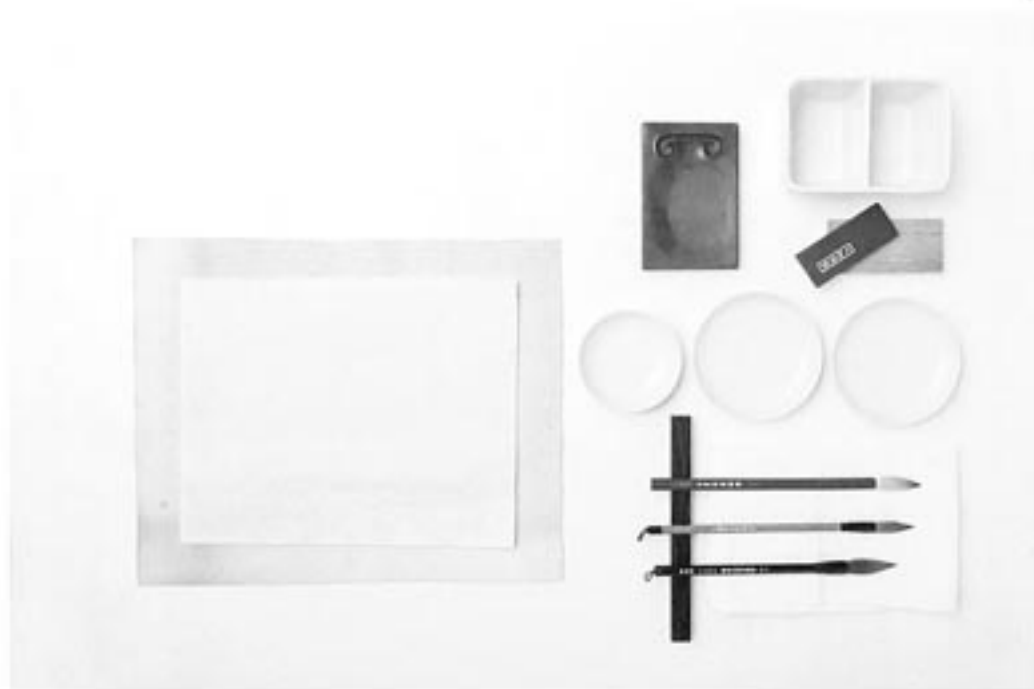
2 用具の基本

教室で指導していたり、水墨画の展覧会場を訪れたりした際によく聞かれることは「墨色をもっと美しく表現したい」「作品の雰囲気をもっと上げたい」という言葉です。そして、これらの要望は水墨画の初心者だけでなく二〇年以上学んでいるベテランの方にも大きな課題になっています。私はその疑問に対していつも「道具の基本をよく知ることです」と答えるようにしています。水墨画の基本的な用具となる筆墨硯紙はシンプルだけに、デリケートな扱いが要請されます。描法の前にまず基本の第一歩となる用具の扱い方を学んでおきましょう。

《筆》

水墨画の筆には各種あり、画材店に行っても多くの方は迷ってしまいますが、私が日頃使用している筆は主に羊毛、イタチ、オロンビー（タヌキ科の小動物）の三本です。この中でも羊毛が一番やわらかく、次にイタチ、一番かたいのがオロンビーです。そして、同じ墨の量（つまり水分が同じ）で描いた時は、羊毛→イタチ→オロンビーの順で「にじみ度」が落ち、「かすれ度」が増します。この三本があれば本書で紹介した作品はすべて描けます。

◆用具の配置に工夫を



◇一般的な用具の配置（右きき）。筆はころがって紙を汚さないように、また筆の自然な動きにマッチしている。



◆筆のおろし方（爪で筆先を割るようにしこいて、筆の穂先をばらしていく）



◆筆の基本的な持ち方（前後左右、自由な運筆が可能）



羊毛…にじみが効く



イタチ…やややすれた筆痕



オロンビー…かすれた筆痕



◆基本となる三本の筆（左から羊毛・イタチ・オロンビー）